

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年1月号

平成二十五年一月一日発行 第二十三卷第一号 通巻第二五九号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



去年今年

高橋将夫

去年の土付いて今年のスニーカー
羽子板に羽子の当たるも縁かな
衝羽根の一瞬止まり落ちてきし
三日はや地球三回転したり

初旅をして買初を済ませたる
去年の人去りて今年の人きたる
精神を形にすれば鏡餅
かの世では要らぬ薬や大旦
羽子つきの数を数へる鬼瓦
門松を立てれば濁世清らなり
宇宙歴エックス年の初御空

槐安集

水野恒彦

ひとり帰りひとりは残る芒原
桃吹くや高嶺に母の忌の来つつ
座してひとり地虫鳴く夜の深みたり
海鳴りの天よりとどく野菊かな
鳥兜ピアスつけたる死者の耳

延広禎一

天籟とも妻の声とも芋の露
亡き妻と天麩羅揚ぐる宵の秋
夕野分哀猿雲に叫びをる
花野に消ゆ妻笈摺をひるがへし
槐の大旗纏ふや秋の日がかつと



加藤みき

露葎はや不夜城になつてゐし
大楠の下に秋興熟睡す
秋の河原阿國の舞と晒し首
薑はまこと僅かに紅をさし
あらたまのとしのひかりの石塊ぞ

石脇みはる

銀杏のさみどり色の朝かな
うかと座すベンチに秋の水たまり
爽やかやロッキングチェア揺れゐたる
見舞終ゆ秋の日差しとなりにけり
桔梗の静かに揺るる竜安寺

中島陽華

十六夜のわたしや大津絵藤娘
色鳥のまつすぐに来て脚立かな
和紙ぐしやと高僧のあり今日の月
鷺草の台に濡るる日イどつぷり
小判鮫あまた見し夜の無月かな

竹内悦子

朱の橋の転ぶなとあり秋しぐれ
曇り日の芒の中の道標
藪からし縞の財布をポンと出す
桜蓼運命線が二本ある
露の世の露草藍を憚らず

栗栖恵通子

幽霊飴ひとつ貰ふて秋の暮
月夜茸迷はし神に迷はされ
笑栗や裡に鬼など囲ひをり
遠灘に月のぼりゆく墨衣
大鼓おおに息吹きかける菊供養

大島翠木

メドウサの蛇寺垣の穴に入る
無花果を割ればムンクの叫びとも
ヂヂヂと老ゆるネオンの十三夜
天高し戯画の兎を眠らしむ
陸軍上等兵の墓と枯蟻螂

雨村敏子

障子貼るあたかも心灯すかに
抽斗に我楽多いつぱい秋燈下
花野から花野へ同行二人かな
呵呵大笑す苦瓜も冬瓜も
灯を消して昼の紅葉の燃ゆるかな

本多俊子

秋風やほほゑむやうに歳重ね
京御所を素通りしたる秋の星
帰燕いま加茂の流れに触れぬたり
裏木戸の音のことんと銀河澄む
不動の面目を凝らすなり月光す

近藤喜子

山越えのかりがね風を乗りかへて
隠し事できぬ木賊の水澄めり
山彦となりし一途な鹿のこゑ
置かれぬる石と向き合ふ秋思かな
満天や星の匂ひの露の玉

谷村幸子

月光やくびれ忘れし青ふくべ
芝生中転がりをりし榎櫃の実
蟪蛄の首をかしげて何思ふ
秋草を濡れ新聞に包みけり
枝つきの櫃の実拾ふ雨の中

瀬川公馨

音信不通の糸のころ草と赤のまま
妹の背に 大往生の鱗雲
つゆ草や青花絞る人のぬし
敬老の日ぞ 重源も頼朝も
草の戸に 千客万来返り花

久保東海司

風と来て風と去りゆくみずすまし
夕月夜土にまだ日のある匂ひ
手に取りて通草熟れたる実の軽さ
みずすまし手をつなぎあひ夕映えに
栗落ちて身軽くなりし一樹かな

西村純太

銀河とも山河とも言ふ浄土かな
椽の実にこつんと打たれ帰りけり
笈を捨て霧に入りたる高野笠
良寛の書に入りけるは穴まどひ
枯蟻螂風を吹かせて忽と消ゆ

中野京子

大股で歩む家路の天高し
雲一つほどの重さの藁塚並ぶ
柿の実の万朶の大樹未迎図
木の実降る自然の手からほろほと
白一杯赤一杯の豊の秋

柳川 晋

千歳の客まろとめきて月見かな
小天狗の温もり残る猿茸
大日や摩耶と阿修羅と鬼の子と
旨酒の山の響きを月夜茸
十月の陰陽石の円みかな

岩下 芳子

波打つて蒼天に入る芒原
源流へ廻りたる穴まどひ
登高のザックに入れる宇宙食
大方の葉は散り柿の照りにけり
棟上げのビル百尺や天高し



槐市集

有松洋子

碑磔貝の泡より生れし大野分
誰も来ぬ門灯ともすも秋意かな
權使ふ音の軋むや秋の果
てのひらに一筋の血 芒折る
なにとなく明日も生きたし虫のこゑ

山田佳子

托鉢僧コスモス畑を見え隠れ
母の書を飽かず眺める良夜かな
訛声は父親譲り 賜 猛る
迷ひなく高きを飛んで去ぬ燕
城翳す「真田幸村」 九月尽

山根征子

天上に余生預けし穴まどひ
聞かぬふりとほる齡や螻蛄鳴ける
落とし蓋ぶくりぶくぶく 鱒煮る
天地のなせる業とや柿撓
コスモスを綺麗に詠むは夢の夢

吉田順子

夕花野風より吾の急ぎけり
生きいきて秋薔薇彩を尽しをり
爪先に触れたる草の白露かな
真つ青の天空に炎え葉鶏頭
大寺の 蕘 眩しや 秋扇



槐集

高橋将夫選

西国も夕日も遠き野菊かな 岡崎 吉田 順子

呼び合ひし声透き通る秋の山

山に咲き海恋ふ色の秋薊

浮き雲の競はぬ流れ藤袴

秋夕焼物として吾染まりけり

神還る袖振る巫女のみ胸へと 枚方 熊川 暁子

花野ゆく身を飾るもの皆はずし

芒野は風の迷路といふ処

鉦叩たたき憂きこと平らにす

東^{あづま}をとこの心身染むる京もみぢ

穂 芒や風に重たき福音書 岡崎 犬塚李里子

萩の風目には見えねど神の影

子規の忌や加茂の流れを後にして

吹き溜まるものに落葉とメランコリー

ドンキホーテ往きて還らぬ虎落笛

芒原修羅道をゆく漢かな 摂津 中田 禎子

この道の能^{あま}褒^{づま}野に続く鳥兜

柿の実の色濃くなりし分水嶺

厨^{くり}にゐて鏡に写つる鱒雲

真昼間の星見定めむ松手入

鷹渡る島にひとつの芭蕉句碑 岡崎 寺田すず江

木曾三川のなかだちをして秋の虹

鳥瓜揺れて嬺歌を愉しめり

反骨の鎌ふり上げて枯蝓螂

ひかりては何も語らず月夜茸

みせばやや他我ためにあり今日も晴 柴田 靖子

露草や地にありてなほ露をだき

ふと掛ける石の温もり葉月かな

擦れ違ふ人々の目にも秋の暮れ

波よせて我をむかへし花カンナ

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

山に咲き海恋ふ色の秋菊 吉田 順子
山に咲く秋菊に「海恋ふ色」を見た作者の感性に共鳴。秋菊もまた、まだ見ぬ世界を夢見るのかもしれない。

〈西国も夕日も遠き野菊かな〉の句は楚々とした野菊を見ながら、作者は彼方の西国と夕日に思いをはせている。西方浄土を思い浮かべているのかもしれない。

〈浮雲の競はぬ流れ藤袴〉の句では、自然体で流れる浮雲に人生を重ねて見つめている。

以上、どの句からも作者のおだやかな精神の位相が伝わってくる。そして、いろんな思いにふけりながら、夕焼に染まっている作者自身を描いた一句が〈秋夕焼物として吾染まりけり〉なのだ。

花野ゆく身を飾るもの皆はずし 熊川 暁子

花道には華やかな衣装が似合う。花野もまた美しく装って出かけたところだが、一切の虚飾は取り去って行くという。作者の心根に共振する。ちなみに、花野は華やかな反面、淋しさも添う。一面に千草が咲き乱れ美しいが、その一つ一つは、つましやかで、淋しい花が多い。虫の音に哀れを感じることもある。本質は虚飾を取り去った世界なのかもしれない。

〈神還る袖振る巫女のみ胸へ〉の句、神は袖振る巫女のみ胸に還るとは初耳。だが、天の磐戸の神話もあることだし、み胸へ還るのだろうか。そして、〈東をとこの心身染むる京もみち〉：神の次は東男。東男に京女というが、東男が京の紅葉に染ま

るところが味噌。

〈鉦叩たたき憂きこと平らにす〉は鉦叩の本質に迫っており、〈芒野は風の迷路といふ処〉は芒野の本質に迫っている。

以上、どの句にもめでたさがあるのがうれしい。

萩の風目には見えねど神の影 犬塚李里子

「萩の風」に「神の影」を見る作者の感性が素晴らしい。

〈穂芒や風に重たき福音書〉の福音書の重さは物理的な重さではなく、内容の重さであろう。〈吹き溜まるものに落葉とメランコリー〉の句、確かに落葉も憂鬱も積もる。〈ドンキホーテ往きて還らぬ虎落笛〉の句、確かにドンキホーテも虎落笛も行きっぱなしといえる。俳諧。

真昼間の星見定めむ松手入 中田 禎子

松の手入れをしながら、真昼の空の星の位置を確かめようとしている。そうしないではいられない心境が窺える。〈菅原修羅道をゆく漢かな〉の句の男と無縁ではない気がする。〈この道の能褒野に続く鳥兜〉の能褒野（のぼの）は日本武尊埋葬の地といわれている。

木曾三川のなかだちをして秋の虹 寺田すず江

木曾三川を跨ぐ虹が雄大。へひかりては何も語らず月夜茸は月夜茸を詠んで深みのある一句。

みせばやや他我ためにあり今日の晴 柴田 靖子

「誰が為に鐘は鳴る」というヘミングウェイの小説がある。しかし、今日のこの好天は「誰（た）が為」ではない我と他の皆のためのものだろうか。ちなみに、「みせばや」は「玉の緒」ともいう。（以下略）